天界　第四十二號　第四卷大正十三年七月號

通俗天文講座（第二講）

太陽の黃道運動（一）

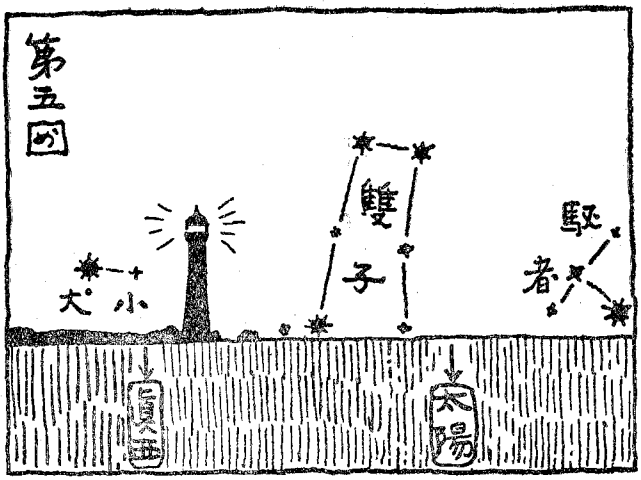
理學士　荒木俊馬

（六）

ニール河の氾濫　金字塔とスフインクスとが永遠の神祕の謎として砂漠の砂に埋もる國、嘗ては世界文化の一つの遡源地としてさん然と輝いた埃及の國は昔から毎年夏の頃のニール河の氾濫によつてなやまされた。勿論其頃一年の何日なるか之を知る由の毫もなかつた頃ではあるが、太陽一度南に去つて再び歸り來るの頃ニール河は恐るべき濁流をその沿岸一帶に溢らした。それは確かにその國の人々にとつては一つの恐怖でもあつたらしく又水去りし後の豐作に對しては大いなるよろこびもあつた。故にこのニール河氾濫の時期を正確に前もつて豫知すると言ふ事は太古における埃及人の大いなる願であつた。かくしてこの要求は當時の埃及の賢者を星の觀察に導いたのであつた。或る學者は金字塔を一種の天文臺であると說をなす者もあるがその說の眞否は今茲に論ずる問題外であるが要するに埃及に天文の隆盛を來した事は、明白の事實である。

荒漠なる砂漠の畔に立つて夜明けまで、天空に於ける星の運行の觀察に耽つた、埃及の賢者が、かくの如くして發見した最も偉大なるものゝ一つは何であつたか。彼等が終夜の觀察が終らむとする時太陽は東の地平線からその赫然たる光線の第一線を送り輝いた星の數々が一つ一つその光を失つて行くのであるが、その太陽の出現の丁度前に東の地平線上に輝く星群は春秋の間絕えず變り行くのであつて、その樣は恰も太陽の光の中々から、日々に新らしい星々が生れ出て來るやうに思はれるのであつた。

かくして太陽の光の中から生れ出て來る星々の記憶を年々歲々くりかへすうちに、彼等は何を發見したか。勿論その頃は未だ今日と同樣の星名がついてゐなかつたのであらうがオリオン星群が生れ出づる頃から三週間位の後に太陽の光の中から生み出される一つの巨大なる星があつた。天空上これより大なる星なき最輝の星であるが不思議にもその星が出現する頃になるとやがてニールの河は規則正しく氾濫するのであつた。此の星は卽諸君の御存知の天狼星(シリウス)であつた。



かくして埃及の賢者は完全にニール氾濫の豫言に成功し、かくて今日の太陽曆の基礎は定められたのであつた。古來太陽曆を最も早く採用した所の國は實に埃及である。

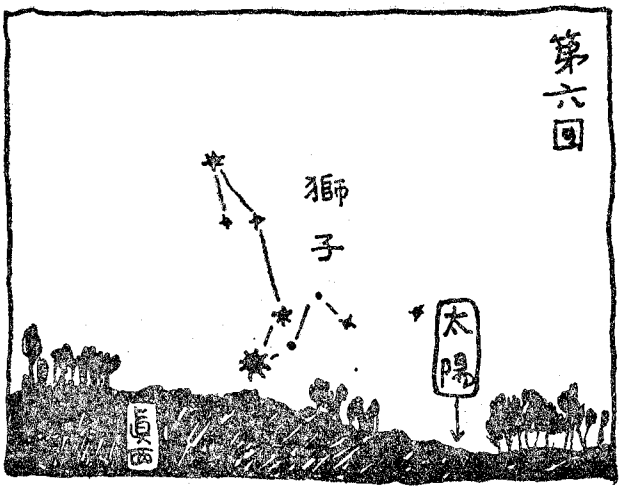
(七)

日沒後の西空　諸君、我々も埃及賢者と同樣の觀察を容易になす事が出來る。試ろみに毎夕日沒時に戶外に立つて西の地平線を望め。太陽の沒落した地點を注視せんか、その最後の光線が次第に薄らぐに從つてその地平線上には一つ一つと星が現れて來る。或歌人の歌にあるやうに

夕空に星一つ居て輝けり
まもりて居れば又一つ見ゆ

その一つ見え、「まもりて居れば又一つ見ゆる」星の群が何座の星であるかを記憶せよ。それ等の星々は一年中決して同一のものでない事は一ヶ月も觀察するものゝ容易に發見する所であらう。卽ち、丁度一日一日に太陽の光の中に星の群々がつぎ〳〵に吸ひ込まれて行くかの如く感ずるであらう。この現象を說明する爲めに第五圖ならびに第六圖を揭げた。第五圖は七月の始めの日沒後、第六圖は八月中旬の日沒後の西空の見取圖である。

扨て此の事は何を物語るでうらうか。私は前號に於て天球上に於ける星の日週運動に就て講釋した。卽ちすべての星は天球上を約一日に一回轉する。而もこの一回轉の時間は吾々の日常用ふる一日ではなくて、一恒星日である事を物語つた。太陽はこれ等のすべての星とその步調を一にせぬと言ふ事である卽ち太陽の方が星の運行よりも遲れると言ふ事であつて換言すれば太陽による一日の方が星による一日卽恒星日よりも幾分永いと言ふ事である。卽ち太陽は天球上星の間を巡行する。然らば太陽は天球上を如何なる道に沿ふて如何なる速さで運行するのであらうか。これ吾人の茲に詳しく論ぜんとする所である。(續く)



煉金術士と子供

星見小路

それは華のやうに星の輝いた新月の夜であつた。中世の封建時代と知り給へ。鉛や石から黃金を製造しやうと夢みて五十年の生涯を爐と藥品との中に研究した老いた白髯の一煉金術士がれ疲果てた心と身體とをその古色蒼然たるゴシックの研究室の窓から横えて蒼穹の彼方の深い深い所から閃めく星に其の眼を向げて居た。とどこからともなく一人の子供がさ迷つて來た。或はその深い蒼穹の彼方からでも出て來たやうにすら思えたのだつた。星の美しい歌を歌ひながら。小兒は疲れはてた老煉金術士に言つた。『おぢさん。おぢさんは、この煉瓦の中で五十年間を何してゐたのだ』と。老煉金術者は淋しい顏をして言つた。『おれはナ。鉛から黃金を造らうと思つたんだ。そしてその爲めに五十年間の生涯を捧げたよ。けれども神樣はそれを成功さして呉れなんだ』小兒は言つた。『おや、若しも世の中のすべての鉛が黃金になつたなら、黃金の價は鉛の價になつてしまうぢやないか』小兒は星の歌を歌いながら去つた。其の後その煉金術士の研究室の煙突からは再び煙が上らなかつた。